

言葉から捉える日本とベトナムの関係 (ベトナム)

突然だが読者の皆さんは、次のベトナム語をご存じではないだろうか? Chú Ý, Kết Luận, Cô Độc。はじめて見た文字だと思われる方が多数だろうが、実はこれらの単語はそれぞれ、Chú Ý = 注意、Kết Luận = 結論、Cô Độc = 孤独、と漢字をあてはめられる。ここで、それぞれのベトナム語の読み方を紹介すると、Chú Ýはチュウイー、Kết Luậnはケツルアン、Cô Độcはコドックとなる。どことなく、日本語の漢字の読み方に似ていないだろうか。



ハノイ市内にある歴史的施設である文廟では、漢字表記が確認できる。

ベトナムは昔から、日本と同様、文化や社会の様々な面で、中国の影響を受けてきた。言葉も同様である。ベトナム語を書き表す文字の一つとして、20世紀の前半までは漢字が用いられてきた。独立の父として有名なホーチミンの氏名も、胡志明、という漢字で表すことができる。また、文廟など、首都であるハノイ市内のいくつかの歴史的施設では、写真のように漢字による表記を目にすることができる。

冒頭で紹介したとおり、現代のベトナム語は、

Quốc Ngữと呼ばれる、アルファベットを基調とした文字で表記され、漢字は用いられない。しかし、Quốc Ngữ、という単語自体にも、Quốc (クオック=国) Ngữ (グー=語) と、それぞれに漢字が当てはめられる。つまり、Quốc Ngữとは、国語、である。このように、ベトナム語の単語で、中国にその起源を持ち、漢字で書き表すことのできるものを漢越語とよぶ。ベトナム語の単語のうち、実に7割が漢越語であるという見方もあり、ベトナムがいかに中国、ならびに漢字の影響を昔から強く受けてきたかが理解できる。

話を日本語に転じると、下の表は、日本語を母語としない人の日本語能力を測定し認定する「日本語能力試験」について、2011年12月と2013年12月の各試験における受験者数を、国別に表したものである。中国と韓国の受験者数が減少する中、ベトナムの受験者数が大きく伸びていることが確認できる。

ベトナムにおけるこうした増加の原因としては、近年の日本企業の進出の増加をあげることができるであろう。ただし、日本企業の進出ではベトナムに先行しているタイ・インドネシアと比べても、ベトナムの受験者数は多い。親日国として捉えられることの多いベトナムだが、こうした日本語学習熱の背景には、漢字を介した両国の言語における近似性も少なからず影響しているのではないだろうか。

(ベトナム日本商工会 事務局長 安藤 憲吾)

日本語能力試験 国・地域別受験者数の推移

(単位：人)	2013年12月	(構成比)	2011年12月	(構成比)	増減
中国	97,834	40.4%	128,356	46.6%	▲30,522
台湾	32,273	13.3%	32,417	11.8%	▲144
韓国	30,917	12.8%	43,205	15.7%	▲12,288
ベトナム	14,498	6.0%	11,067	4.0%	3,431
タイ	10,309	4.3%	7,885	2.9%	2,424
インドネシア	9,205	3.8%	7,271	2.6%	1,934
(海外合計)	242,282	100.0%	275,610	100.0%	▲33,328

出所：日本語能力試験・統計データ <http://www.jlpt.jp/statistics/index.html>